

# Culture in Psychiatry



## 村上春樹の『ノルウェイの森』

高橋 正雄 筑波大学人間系教授

1987年に発表された村上春樹の『ノルウェイの森』（講談社）には、阿美寮という療養所に入所しているレイコという38歳の女性が登場する。阿美寮は京都市内から北へバスで1時間ほどの山中にある精神科の療養所で、そこではほぼ自給自足の生活をしながら、患者と治療者が仲間としてお互いに助け合うコミュニケーションのような先進的な医療が行われていたのである。

そもそもレイコが最初に精神変調をきたしたのは音大の4年生の時だった。4歳でピアノを始めてからピアニストになることだけを考えて生きてきたレイコは、コンクールで優勝し、音大でもずっとトップの成績をとるなど、「一点の曇りもない青春」を送っていた。ところが、ある大事なコンクールの練習中に、「突然左の小指が動かなく」なったのである。マッサージをしたり、お湯につけたり、2、3日練習を休んだりしたが、全然効き目がない。病院で検査をしても、医者には「指には何の異常もないし、神経もちゃんとしているし、動かないわけがない」と言うばかり。精神科へも行ってみたが、

そこでも「コンクール前のストレスでそうなったんじゃないか」、「とにかく当分ピアノを離れて暮しなさい」と助言するだけだった。

そのためレイコは、コンクールを諦めて2週間ほどピアノに触らずに好きなことをして遊ぼうと思ったが、「何をしても頭の中にピアノのことしか浮かんでこない」。それまでピアノが人生のすべてだったレイコは、「一生このまま小指が動かないんじゃないだろうか？ もしそうなったらこれからいったいどうやって生きていけばいいんだろう？」と、同じことばかり考えてしまうのだった。

結局、「頭のネジがどこかに吹きとんじやったのよ。頭がもつれて、まっ暗になっちゃって」という彼女は2ヵ月入院し、小指は動くようになったものの、ピアニストになる夢は断念せざるをえなかった。「もう何かが消えちゃったのよ。何かこう、エネルギーの玉のようなものが、体の中から消えちゃってるのよ。医者もプロのピアニストになるには神経が弱すぎるからよした方がいいって言うしね」。

大学卒業後は家で生徒に教えていた

が、人生そのものが終わったみたいだった。「誰も拍手してくれないし、誰もちやほやしてくれないし、誰も賞めてくれないし、家の中にいて来る日も来る日も近所の子供にバイエルだのソナチネ教えてるだけよ」。

そんなレイコは、当時の家庭の雰囲気、[両親も私のことを腫れものでも扱うみたいに扱ってたわ。でもね、私にはわかるのよ、この人たちががっかりしてるんだなあって。ついこの間まで娘のことを世間に自慢してたのに、今じゃ精神病院帰りよ]、「一緒に暮しているとひしひしつたわってくるのよ。嫌で嫌でたまんなかったわ」と伝えている。

音楽に限らず、幼い頃から才能を持って囃され、周囲の期待を一身に集めて育った者が挫折時に味わいがちな絶望感や居場所のなさを、レイコも感じていたのである。

その後、24歳の時に「外に出ると近所の人が私の話をしているみたいで、怖くて外にも出られない」という関係妄想のような症状が出現したレイコは、再び「ネジがとんで、糸玉がもつれて、頭が